

十九世紀の広東語(10)上昇変音③

竹越美奈子

一

前回は、Ball(1883)*Cantonese Made Easy* 初版から声調について記した部分を引用した。これからわかることは、ボールは非常に耳がよく、テキストを編纂するときに声調の微細な違いに気を配って記述したということと、中国語修得における声調の重要性を深く認識していたということである。

二

このように声調の重要性を熱く語るボールであったが、では声調とはいったいどういったものなのかについて、1883年発行の初版では、先生のまねをして練習せよ、というだけで具体的な説明はなかった。(INTRODUCTION XI~XII) この点本人も気になっていたのかどうか、1888年発行の第2版では大幅に加筆している。声調を修得することの重要性、声調が違ふと意味が変わる実例、有気音・無気音の違いも重要であるがそれと同じくらい声調が重要であるということ、音楽的な耳と模倣する能力があると上達が早いがないからといってあきらめるべきではなくある程度練習でカバーできることなどを述べたあとで、では声調とはなにか、について発音でも強調でもアクセントでもないとした上で、次のような説明をしている。

声調とはある語に使われる音声の特定の形とか屈折、といえるかもしれない。各語はそれぞれ独自の声調をもっていて、2つあることもあり、時に応じて使い分ける。各語で音声配置される形は漢字によって決まっている。その形とは、ある声調にとっては高さのレベルもしくは高さを一定に持続させた調子であり、このグループに属する声調同士の違いは音楽というピッチのようなものである。他の声調にとって、それは音声が高くなっていく調子であり、あたかもバイオリンの弓がバイオリンの弦の上を引かれていくときに、演奏者が指を低い音域から高い音域へすべらせるようなものである。このグループに属する声調同士の違いは音声の上昇する調子全体である。もうひとつのグループは音声が高くなるもしくは落ちる調子で、このグループの声調間の違いは、他のいくつかと同様、高いか低いかである。それともうひとつ、「消え入るような調子」と記述されてきたグループがあり、このグループの声調はお互いに音楽的な高さの違いによって区別できる。(Ball 1888. *Cantonese Made Easy* 2nd ed. : XX-XXI)

次にボールは「次にあげるのは広東語の 12 声調の一覧である」とするが、実際にあげているのは次の 11 類である。(他にもあることはあるがその存在が立証されているわけではない、との但し書きがある。12 としたのは単純な誤植なのか、内心 11 より多いとおもっているからなのか)

上 上平、上上、上去、上入

中 中平、上声変音、中入

下 下平、下上、下去、下入

以上、11 類のうち、今日一般に認められているのは上平、上上、上去、上入、中入、下平、下上、下去、下入の 9 類である。上声変音については、ボール自身が注をつけて、「これはこの声調の正式な名称と呼べるものではなく、下平、下去および他の声調が場合によって上昇するものである」と説明している。これが今日のいわゆる「上昇変音」である。ボールは、上昇変音という現象に十分に気づき、それを意識して教科書を編纂したのである。そしてその漢字が他の発音(声調)をもつ場合にはアスタリスクをつけている。この方式は今日も粵語の教材などで上昇変音を示すときに広く用いられている。

三

さて、実際にボールのテキストにおける変音の記載状況はどうなっているのか。下の表 2 は、*Cantonese Made Easy* の初版、第 2 版、第 3 版の記述を 1843 年の *Easy Lessons in Chinese*(Williams1842) (第五章会話篇)、1912 年の *Cantonese Phonetic Reader*(Jones & K.T.Woo1912)の記載と比較したものである。十九世紀の広東語(8)に記載した表 1 をもとに作成した。表 1 でも指摘したように、ここでとりあげた語は現代語の辞書では基本的に上昇変音で記載されている。なお、凡例は表 1 と同じ。

表 2：早期粵語資料における上昇変音の用例 (1842 年～1912 年)

漢字	早期粵語				
	Williams (1842)	Ball 初版 (1883)	Ball 2 版 (1888)	Ball 3 版 (1907)	Jones (1912)
話 (名詞) 6	英話 6, 俗話 6/*, 官話 6/*, 白話*, 一句話*, 土話*	唐話*	唐話*	唐話*	唐話*
文 4	白文 4	—	—	—	—
名 (名詞) 4	名 4, 人名 4, 地名 4, 佢名 4	名*, 人名*	名*, 人名*	名*, 人名*	名*
下 6	郷下 6	郷下*	郷下*	郷下 5 ¹⁾	—
銀 (お金) 4	工銀 4, 銀 4	銀*	銀*	銀*	—

錢 4	銀錢 4	銀錢*	銀錢*	銀錢*	個半銀錢*
枱 4	寫字枱 4	枱*	枱*	枱*	—
頭 4	事頭 4, 舖頭 4	事頭*	事頭*	事頭*	—
轎 4	抬轎*佬	抬轎*佬	抬轎*佬	抬轎*佬	—
房 (部屋) 4	房 4	房*	房*	房*	—
路 6	來路 6 (舶來の)	—	—	—	—
位 (量詞) 6	位 6	位*	位*	位*	—
袋 6	枕袋 6	—	—	—	—
魚 4	石斑魚 4	魚*	魚*	魚*	—
年 4	今年 4	—	—	—	—
様	—	—	衰様*	衰様*	點様*
舖	—	舖 3	舖 3	舖 3	磁器舖*
門 4	—	衙門*	衙門*/4	衙門*	衙門*
吔 1	—	中中吔 1, 痲痲吔*	中中吔*, 痲痲吔*	中中吔*, 痲痲吔*	平平吔*
蛋	—	鷄蛋*	鷄蛋*	鷄蛋*	—

i) 誤植か。

表 2 より、ボールの著作における上昇変音の例はウィリアムスの著作より大幅に増えていること、そしてジョーンズのインフォーマントもボールの記載とほぼ同じことがわかる。(ジョーンズがボールの書を参考にしたかどうかは不明であるが、仮に参考にしたとしても、音声学者のジョーンズは中国の音韻学の伝統より客観的な音声そのものに関心があったはずなので、先人の記述に関係なくインフォーマントの発音を正確に記述したはずである)

ボールの著作中の変音の例がウィリアムスより増えている要因が 40 年間の口語の変化なのか、あるいはボールが口語の採集と収録にこだわってわずかな声調の違いにも敏感に反応して記述したということなのかはわからない。したがって、小文のテーマであった「上昇変音がいつ頃どのように成立したのか」については早期粵語資料からはわからなかったと言わざるを得ない。しかしながら、ウィリアムスの時代にはすでに萌芽が見られ、ボールの時代には確実にあったということだけはわかったのである。

さて、ボールは声調にはよほどこだわりがあったらしく、1907 年発行の第 3 版ではさらに声調の説明に大幅な加筆を加えている。これについては稿を改めて論じたい。